台湾輔仁カトリック大学　臨床実習報告書　＃１

初めに、この様な貴重な経験をさせて頂いた福森先生をはじめとする関係者の方々に心よりお礼申し上げます。僕は以前から海外留学にはとても興味がありましたが、具体的なイメージは無くただ単純に海外留学をしたいという思いだけが強くありました。今回台湾に行ってみて、日本の医療技術の高さや、海外に影響を与えているなという印象を受けることもありましたが、台湾の医師達の英語力や医療技術の高さを見て、少なくとも自分はこのままだと海外の同年代の医師達に負けてしまうなという危機感を感じました。この危機感を今後の学習に活かし、また常に医療先進国のみならず近隣のアジア諸国の医療にも目を向け、刺激を受け続けたいと感じました。

以下に台湾での日々の経験を簡単に書きます。

Shin Kong Hospital

~1 日目~

新光病院での初日は英語での 1 時間に及ぶケースカンファレンスから始まった。1 つの症例に 1 時間かけていた。症例報告の後に疾患のプレゼンまで行われていた。その後チーフレジデントに小児科病棟を紹介してもらった NICU・PICU があった。佐賀では PICU という言葉は聞きなれないが新生児期を過ぎても集中管理が必要な子が入院していた。

外来の待合室はとても広く壁じゅうに絵本のような絵があったり子供番組を写したりしていて患者に配慮してるように感じた。

この病院で主に面倒を見て頂いた Dr.王は日本の医学部を卒業していてとても日本語が上手だった。

~2 日目~

朝の回診では 1 人の患者に 10 分程かかっていた。患者の親が毎回文句をつけてくるので、台湾では患者と医者の関係が難しいと付き添いの先生が教えてくれた。回診の後、腹部エコーを見学した。胃や肝臓から膀胱や大腸までくまなく見ていたこと以外はあまり日本と変わりなかった。次はベビールームにてマススクリーニングの様子を見学させてもらった。台湾では 11 個の病気をスクリーニングするそうだ。

NICU・PICU を見学させてもらった。この病院で生まれた子供と外部の病院から運ばれてきた子供を別の部屋に分けて感染症に気をつけていた。

VIP 外来と病棟がこの病院にはあって Dr.王に紹介してもらった。VIP 外来は普通の外来とは別のところにあり、患者があまり移動しないでいいように一箇所に採血や検査、外来があり、薬もその場で看護師さんに持ってきて貰えるそうだ。VIP 病棟はまるでホテルの様で、病室の隣に各々の個別の会議室があり、電子レンジやシンク、50 型ほどの apple TV 付きのテレビまであった。浴室は湯船は無いがとても広く洗剤はロキシタンのもので毎日交換されるそうだ。1 泊 20000 元するそうだがいつもほぼ満室だそうだ。

~3 日目~

小児の心エコーを見学した。小児の心疾患をあまり実習で見ることができなかったので、希望を聞いてもらいスケジュールに組み込んでもらえた。台湾大学から来た先生のエコーを見せてもらった。川崎病の患者が多かったが ASD や PDA など様々な疾患の心エコーを見ることが出来た。

~4 日目~

小児科外来を見学した。喘息の患者が多かった。1 組の患者が出ていく前に次の患者が部屋に誘導されていてプライバシーには日本程厳しく無い印象だった。台湾ではサラセミアが日本よりも頻度が高いそうで、サラセミアと鉄欠乏性貧血の鑑別の仕方を習った。

午後にはbaby care center を見学した。これは台湾独特の施設で出産後の母親が赤ちゃんと一緒の建物に一か月間泊まれる施設で赤ちゃんの様子を24時間見れる様になっていた。赤ちゃんの検査の様子を母親が心配そうにガラス越しに見ていた。部屋のテレビやスマホのアプリからカメラで赤ちゃんの様子を確認できるそうだ。産後すぐに自立した生活をするのは難しいと思うのでこの制度は母親に優しい制度だなと感じた。この施設を紹介してくれたムー先生はパワフルで、母親が利用中の部屋で集合写真を盛れるアプリで撮ってくれた。夜は小児科の先生方が火鍋のお店に連れて行ってくれた。みんなとても仲が良く楽しそうな職場だなと感じた。

~5日目~

幼稚園の健康診断を見学させて頂いた。歯科検診と眼科検診、身体検査を行なっていた。国の制度で行なっているそうだ。鼠径ヘルニアや停留精巣のチェックも行なっていた。午前だけで二つの幼稚園に行った。子供の数がとても多く流れ作業で次々に検診していた。最後は小児科病棟の皆さんと写真を撮った。夜はDr.王に食事に連れて行ってもらい新光病院の実習が終わった。

Cardinal Tien Hospital

~1日目~

cardinal tien hospital では自分は神経内科を選択した。実習は英語でのケースカンファレンスで始まった。自分の面倒を見てくれたDr.葉は台湾では有名な先生だそうで要求も高く、いきなりケースカンファレンスでの症例をまとめてみてと言われた時には戸惑いを隠せなかった。カンファレンスの後は神経診察のレクチャーがあった。他にまわっている学生がいなかったのでマンツーマンで各診察のコツなどを教えていただいた。午後は回診と1人の患者のCTやMRIの画像を読影してDr.葉とディスカッションを行なった。脳梗塞の患者の画像所見からarea→territory→支配血管の要領で病変の主座を見つける方法や、時間経過による画像所見の変化などを熱心なマンツーマン指導で教わった。

~2日目~

神経内科、脳神経外科、放射線科合同カンファレンスを見学した研修医や若手の先生ではなく上級医がプレゼンをしていた。その後、認知症ボランティアの方々と会ってお話を聞かせて頂いた。台湾でも認知症患者の数は増加しているが 、認知症ボランティアはまだあまり普及していないそうだ。ボランティアの方々多くは定年退職した65歳以上の方々が多く、自分も明日には認知症になるかもしれないと冗談で言っていた。台湾でも日本と同じ様な状況だということがよくわかった。 認知症外来も見学することができた。MMSEとRBANSを行なっているところを見学した。患者さんはただでさえ緊張していただろうが、見知らぬ外国人の見学も快く受け入れてくれた。

~3日目~

Dr.林の回診についた。一人一人の患者の来院時の様子から現在に至るまでのプロセスを分かりやすく丁寧に教えてくれた。拡散強調画像の仕組みの詳しい説明や、dizzinessを主訴に持つ患者の診断プロセスなどを教えて頂いた。分からなかったところはより簡単な説明で分かるまで教えていただきとても有り難く、非常に為になった。

~4日目~

木曜日と金曜日の朝は全ての科の先生方が集まる勉強会があった。木曜日はHBV感染についてだったが中国語だったので内容は分からなかった。午前中は針筋電図検査を見学した。午後は若い先生についていき、若い先生方がどの様な仕事をしているのかを見学した。台湾では未だに紙カルテが主流だそうだが、これから

は電子カルテが徐々に増えていくそうだ。まず若い先生がカルテを書き、そのカルテを上級医の先生が訂正するという形を取っていた。若い先生は週に2回当直があり、当直の日は前日通常通り業務を行なった後にそのまま次の日の午後12時まで勤務するそうだ。
~5日目~
金曜日の勉強会は鍼灸治療についてだった。中華圏っぽいなと思ったが、これも中国語のみで内容は全く分からなかった。この日は認知症の患者たちのグループワークに参加した。この日は色紙をちぎって絵に貼るという作業をしていた。鮮やかな色を見ることや指を動かすことが脳に刺激を与えるそうだ。一人絵がとても上手な人がいて似顔絵を描いてくれた。

この病院ではカルテのパソコンからすぐに論文を検索できるようになっているのでとても便利だと感じた。先生方はとても面倒見がよくマンツーマンで多くのことを学べた。

Cathay General Hospital
~1日目~
Cathy general hospital では自分は胸部外科を見学した。初日は外傷による緊張性気胸の症例をスライドで説明して頂いた。その後その患者を実際に見ることができた。お昼は胸部外科の部長とお昼ご飯を食べた。部長は5年間日本で修行をして台湾に胸腔鏡手術を広めた偉い先生だった。その先生は台湾の医療保険制度は世界一なので医学的なことよりもそっちの方を見ていってほしいとおっしゃっていた。
~2日目~
この日は分院の方で、ICUの患者に気管切開を行い人工呼吸器を装着する手技を見た。普通はエコーを使って行うがここの先生方はエコーを使わずに行なっていた。100人やったらエコー入らないよとおっしゃっていた。この日は手術が無く、お昼に美味しい鉄板焼きをご馳走して頂いた。
~3日目~
肺癌の手術を2件見た。どちらも胸腔鏡下に手術を行なっていた。肋間に3つの穴を開けるところは日本で見たものと同じであった。動きが速いというかためらいがないというか、どんどん鉗子を進めていき、区域切除をほぼ連続で終わらせていた。日本で見た時よりも早く終わったように感じた。
手術が終わった直後に次は救急外来に来た緊張性気胸の患者にピッグテールカテーテルを挿入する手技を見学した。忙しい中でもしっかり英語で自分たちに説明して頂いてとても有難く、日本で見たことのない手技であったのでとても勉強になった。
~4日目~
下部食道癌摘出及び胃管造設術を見学した。佐賀では消化器外科が行なっているがこの病院では胸部外科と消化器外科が合同で行なっていた。まず消化器外科が開腹で胃管を作る作業をし、開腹を閉じてから側臥位にして胸部外科が食道摘出と胃管の接続を行なっていた。佐賀で行なっている手法の方が手術時間は長いが傷口はとても小さいなと感じた。
~5日目~
肺内リンパ節摘出と肺内腫瘤摘出の二つの手術を見た。肺内リンパ節はCTでは末梢型小型肺癌とほとんど区別がつかずに驚いた。この手術は手術時間が短いので気管挿管はせずにラリマで行なっていた。小児の手術ではよく見たが大人では初めて見た。最後の肺内腫瘤は内部が乾酪壊死しており、恐らく結核ではないかと先生はおっしゃっていた。安全だという説明を受けたがいまいちよく分からず最後に悔いが残った。

台湾で自分達に関わってくれた方々は皆とても親切で英語力があり、同年代でさえも尊敬できる人達ばかりだった。一緒に行った仲間はとても優秀で何度も助けられた。様々な人達からいい刺激を受けることができた。この刺激を今後に生かしていきたい。
後輩たちへのアドバイスとしては、寮生活を行なったことのない人は初めは慣れるのに大変かもしれない。まずは同じ部屋に現地の学生や職員の方々がいるが、基本いい人達ばかりなのでそこは安心してほしい。基本ベッドと机とロッカーだけなので生活に必要なものは全て自分で用意しないといけない。洗濯機は共用のものがある。洗濯洗剤などは現地でも買えるが、日本から持って行った方が安い。食べ物は病院の周りのローカルな飲食店が安くて美味しいので積極的に開拓して欲しい。自由時間も多く、現地の学生達が色々なところへ連れて行ってくれるので観光もしっかり出来る。でも遊び過ぎて体調を崩さないようにして欲しい。気温と湿度はかなり高いが冷房が強すぎる所もあるので羽織れるものを一枚持っていくといい。

台湾輔仁カトリック大学　臨床実習報告書　＃２

今回の海外臨床実習に参加する以前は、自分自身の英語力にあまり自信がなかったので少し不安を抱えた状態での参加となりました。留学自体も私にとっては初めての経験であり、台湾に行く直前までとりあえずは自分ができることをきちんと準備して海外臨床実習に参加しようと考えていました。具体的には、知り合いの英会話教室に頼んで 3〜4 か月通わせてもらったり、4 年次に受験した日本医学英語検定の教材を見返したりしました。台湾の医学生の英語力に関しては、福森先生が仰られていたように大変優れていると聞いていたので、同等の英語力でコミュニケーションをとるのは現実的には難しいだろうなと考えていました。なので今回は彼らから良い刺激を受け、学ばせてもらおうといったスタンスで臨もうと考えていました。

実際に台湾に行ってみると、まず一番に驚いたのが現地の医学生の英語力です。個人差はありましたが、ほとんどの学生が流暢に英語を話せており、9 月に佐賀大学に来てくれる輔仁カトリック大学の 3 人の学生についてはネイティブ並みの会話力でした。したがって、現地に赴いてはじめの方は彼らとの会話の中で聞き取れないことも度々あり、コミュニケーションで苦労しました。私の英語力に合わせて会話してくれる学生もいて、有難い気持ちもある反面、歯がゆく少し悔しい気持ちもありました。自分の考えていること・思っていることを伝えるのも、慣れるまでは大変でした。流石に 3 週目に入ると、かなり彼らの言っていることもほぼ分かるようになり、私自身が伝えたいことも自分の英語力を総動員して伝えられるまでには成長しました。やはり当たり前ではありますが、コミュニケーションがスムーズにとれるようになると、本当に楽しいですし、同時にもっとレベルの高いコミュニケーションをとれるようになりたいと思うようになりました。

台湾での臨床実習では、各科の先生方が私たちに分かるように丁寧に熱心に英語で説明して下さりました。医学の知識がベースにあるので、それも助けになり、先生方が伝えようとしていることはなんとか理解できました。実際に台湾に医療の現場を見てみて、日本と台湾の医療はそこまで大きな差はないのかなといった印象を私は受けました。ただ、外来で待合室の患者が診察室に入ってきたり、診察が終了した患者が再度診察中の診察室に戻ってきたりといった光景は、私が外来見学をしていたなかで度々起きていました。その点については、遠慮しがちな日本人とは異なった台湾人のキャラクターが顕著に表れているのかなと感じました。自分が言いたいことははっきり伝え、納得するまでは引き下がらない患者が多く見受けられました。‘人を診る’診察においては、このような国民性が如実に表れやすいですし、興味深かったです。

およそ 3 週間の台湾滞在では、体調を崩すといったハプニングもあり大変でしたが、同時に、台湾人の優しさをとても感じることができました。国や国民性は異なりますが、困った人に手を差し伸べる人としての優しさは言葉が十分に伝わらなくても分かるものがありました。国民性や文化が違うため、実際にその地へ行くと驚くこともありましたが、それもお互いの個性だと認め合うことが重要なのだと今回感じました。ベースにあるものは同じ人間なのだから共通するものがあるということを実感できたのも、私の大きな経験となったと思います。

今回の海外臨床実習留学を経て、今度は医師として海外に学びに行きたいと強く思うようになりました。今後海外に学ぶに行く際には今回の反省を踏まえて、英語力、特に話せる力をもっと高めて、自分が伝えたいことや質問したいことを十分に発信できるようになって臨みたいと考えています。今回英語力は決して十分ではありませんでしたが、それでも飛び込んでみることで、次に繋がるような目標を持てたのは大きかったです。

台湾輔仁カトリック大学　臨床実習報告書　＃３

Introduction

私は今回、台湾輔仁カトリック大学臨床実習に参加した。

病院内おける医療英語に関してはあまり困難には感じることはなく、医学の知識において苦労することはなかった。医学の勉強については日本ですればよいと思うので、やはり今回の実習においては、海外での医療現場、環境、制度に重点を置いて三週間実習を行った。

First week

新光吳火獅紀念醫院で小児科の実習を行った。見学したものとしては、小児の腹部、心臓のエコー、幼稚園への検診、喘息患者の外来、NICU、小児病棟があった。

大学ではあまり見ることのなかった小児の心臓のエコーを見ることができたがことはすごく勉強になった。疾患としては川崎病のフォローアップや動脈管のフォローアップが多かった。日本と異なるものとして、産後１ヶ月まで新生児を世話する施設があるのが印象的であったが、その施設の利用は高額で誰もが気軽に使えるというわけではなさそうであった。

小児科での朝のモーニングミーティングではディスカッションが英語で行われて、症例からのその疾患に関する論文に関するものまできっちり１時間あり、内容としては密なものであった先生方がすごく自分たちに丁寧で親切に教えてくださって勉強になった。

台湾の学生は半分ぐらいが留学をするという。勉強熱心だ。英語は日本人よりもすごく上手であった。日本の病院で、英語で留学生に指導や、英語でカンファレンスといった場合どういった結果になるかは想像にやすい。彼らは日々、英語でニュースを見たりと、しっかり英語のトレーニングを積んでいるそうだ。高校までの英語教育は義務教育では同じのようであったが、塾に行き英語のトレーニングを自分たちで積むことで、高い英語能力を獲得しているようであった。

Second week

天主教耕莘醫院で総合内科の実習を行った。

本来、日本と同じような総合診療的側面をみたいと思って希望を出したが、実際実習をしてみると、さまざまな診療科を隔たりなく診る総合内科的側面の占める割合が大きかった。この1週間では、朝のカンファレンスの参加と様々な手技を見学するというのがメインでした。この1週間、総合内科では、マレーシアから来ていた留学実習生が一緒に回っており、中国語での説明を英語に翻訳してもらったり、などお世話になった。このマレーシアの学生が朝に心電図や胸部X線のプレゼンを行なっていたが、そのプレゼン能力の高さに驚いた。日本の講義よりも分かりやすく、自分も頑張ろうと刺激を受けた。

また見学した手技としては、胸水穿刺や、腹部エコー、胃管挿入、と様々であった。印象に残ったのは胸水穿刺で、実際に胸水をドレナージするところから、その胸水の種類として、実際に乳び液、淡黄色、血性のものと多種の胸水をみることができたことだった。教科書的な知識や画像では知っていたが、百聞は一見にしかずとは言ったもので、実際に見ることができたのはよかった。

この1週間で残念だったのは、多くのことがやはり台湾で実習をしているだけあって、中国語で行われるため、多くは理解出来なかったことだ。朝のカンファレンスも始めは英語でも、途中で討論になるとやはり中国語になってしまい、すっかり蚊帳の外であった。そして、ここでの担当であった先生が中国語を話すか、英語をつぶやくようにボソボソっと言うので、聞き取れないことが多かった。あとは、日々のスケジュール

が決まっておらず、同じ実習を回っているマレーシアの学生から連絡を受けて一緒に病棟を回ることが多かったので、その点は改善点として挙げられる。

Third week

國泰綜合醫院で胸部外科の実習を行った。

ここのボスは、日本に留学して胸腔鏡を台湾に持って帰って始めたと言っていた。

台湾は医療費がほとんど保険で賄われるため、個人の負担が少なく大量に患者が来るため、ナースやドクターは疲弊しているという話を聞いた。どこの大きな病院といつも人がいっぱいなのは、やはり大きな病院の方がクリニックより良い設備、良い医者が揃っているからだという。日本のように患者を選別、分類していく仕組みがないから、こういったことが起こるという話であった。胸部外科は年間 2 万件のオペをこなし、オペのスケジュールも間 1 時間くらいでとてもタイトだという。残業は、罰せられるので、出来ず、限られた時間内で業務を行うのが、とても難しいということであった。医局ではモンゴルから来ているドクターとも会い、台湾は留学にも行くし、受け入れも多く行なっており、開かれた医療環境であると感じた。

見学した手技、オペとしては、気管切開の手技、肺の部分切除の手術、救急での気胸の患者のピッグテールドレーンチューブの留置の手技を見学した。日本では予定されたオペ室での気管ストーマ増設しか見たことがなかったので、病室での気管切開が見ることができたことはよい経験になった。

見学して気づいたことは、オペの準備から終了までの手際のよさだ。予定が次々とあるので、オペが終わると大体 30 分以内にオペから搬出される。医大での実習では、この搬出まで時間が長いため、この違いを 1 番に感じた。またオペ室もだが、ICU、病棟も含めて消毒があまり置いてなく、感染予防については日本の方がしっかりしているように感じた。

そして、台湾では弁当文化が発達しているからか、病院内での昼食は医師含めスタッフのほとんどが外注の弁当でとっている。オペ室を出て更衣室を出た控え室のところで、みなが、オペ着で昼飯をかきこんでいた。これは忙しいからなのもあるだろうが、印象的な光景であった。

外科については結局オペの見学になってしまい、日本とのオペの体系の違いなどを見れる以外に大きな収穫はなかった。期待していた日本で見れない海外特有の疾患などが見れなかったのは残念であった。

台湾の病院実習では実習の前にその科のビデオを課されて予習をする。私たちの大学では、科の予習は個人の自由となっており、その仕組みのついてはよいと感じた。

今回選べた科の選択肢として、与えられた選択肢しかなかったが、実際に台湾に行ってみて、見れるなら見たかったと思った診療科は感染制御部と救急であった。

Summarize

こうして私たちの 3 週間の臨床実習が幕を閉じた。

自分にとって二回目となった今回の留学で再認識させられたのは、やはり英語でのコミュニケーションの困難さだった。1 度目の留学のハワイは会話は主にネイティブとであり、自分たちを気遣ってゆっくり話してくれて、かつ、自分たちの英語も単語単語で理解してもらえていて、なんとなくコミュニケーションが取れている気がしていた。しかし、台湾では、英語は第二外国語であり、条件は日本人と一緒、そんななめたことは通じなかった。

台湾の人はさらに加えて、英語を中国語、台湾語のようにすごく早口で流暢に話す。この listening が非常に困難であった。痛感したのは、やはり日本語で恵まれた医学教育であるがゆえの日本人の英語への意識の

低さ、自分たちの英語の稚拙さであった。今後の課題として、英語能力、つまり、speaking &hearing!の必要性を再認識させられた。この実習を通じて、英語への勉強の意欲がさらに高まった。

英語を通じてドミトリーで出会った様々な国の人と交流を持てたことは今回のドミトリーに泊まることならではイベントだったと思う。もちろん英語も日本語もが通じない人も
いたが、そんな人たちとスマホを片手にグーグル翻訳でコミュニケーションを取りながら、ご飯を食べに行ったり、なども、すごく良い経験になった。

やはり、留学という機会は、自分に刺激を与える場としては最高であると考えている。人間は慣れ、常に楽に流れようとする。その流れに反して大学生活の中で、自分をどこまで追い込み高められるかが今後の人生を左右していくのだろうと私は思う。勉強したい、他所の医学教育に興味がある、世界に興味がある、という人は、是非機会があれば、留学してみてはいかがだろうか。人生万事塞翁が馬。思い切って何かに挑戦してみてはどうだろうか。

最後になりましたが、今回の台湾臨床実習に際してお世話して下さった佐賀大学の小田先生、福森先生、青木先生、植田先生、また台湾での実習でお世話をして下さった臨床実習でお世話になった各病院の先生方、佐賀大学および医学部同窓会・医学部後援会のご支援のより実習に行くことができました。自身の英語能力的な未熟さをある中でこのような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。この経験を今後に生かしていきたいと思います。またこの経験を後輩たち、佐賀大学の学生に還元していきたいと思う。

台湾輔仁カトリック大学　臨床実習報告書　＃４

まず初めに、今回の留学に際して様々なお力添えをいただいた青木先生、福森先生をはじめとする国際交流部会の先生方、台湾でお世話してくださった病院の先生方、佐賀大学および医学部同窓会、医学部後援会に心より感謝いたします。貴重な機会をいただき大変有意義な留学をすることができました。

私は 2018 年 5 月 5 日から 5 月 26 日にかけて、台湾での臨床実習留学に参加しました。3 週間の実習期間の中で 1 週間ずつ 3 つの病院を見学しました。

【1 週目：新光呉火獅記念醫院 Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital】

1 週目は小児科で実習を行いました。内容としては、NICU、腹部超音波検査、外来、post maternal center、幼稚園の健診などを見学しました。幼稚園の健診では身体診察、視力、聴力、歯科検診が行われていました。視力検査では日本のようなランドルト環ではなく E の形が使われていました。

Post maternal center は母親の負担を減らすことを目的として、産後 1 か月までの新生児と母親が滞在できる施設です。小児科の医師は新生児の身体診察を行っていました。母親は 1 泊 3 万円と滞在するには高額ですが、面白い仕組みだと思いました。

【2 週目：耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital】

2 週目は総合内科での実習でした。この週は輔仁大学の学生が実習で回っておらず、過去の報告書に書いてあったような患者さんを担当したり、カンファレンスで発表したりということができなかったのは残念でした。実習内容としては胸腔穿刺、PCI、腹部超音波検査の見学といった手技の見学が主でした。胸腔穿刺は漏出性胸水、血性胸水、乳糜胸水の 3 種類を実際に見ることができ、日本では実際に見たことがなかったので勉強になりました。

また、台湾に来てからタトゥーを入れている人と路上で喫煙をしている人を多く見かけ、それぞれに関連した病気（B 型肝炎・C 型肝炎や肺癌）が多いのではないかと思ってドクターに聞いてみたところ、やはりタトゥーを入れている人の肝炎や HIV 感染、喫煙や檳榔（噛みたばこ）による肺癌・口腔癌は多く問題になっているという答えが返ってきました。台湾の文化や風習にまつわる病気を知れて興味深かったです。

【3 週目：国泰綜合醫院 Cathay General Hospital】

3 週目は心臓血管外科での実習でした。月・水・金曜が手術日ということで手術を見学し、それ以外の日は回診や次の日の症例の病気や術式についてのレクチャーがありました。見学した手術内容としては CABG、大動脈弁置換術、EVAR、CV カテーテル抜去・留置がありました。CV カテーテル抜去では手洗いをして助手をさせてもらいました。手技自体にはあまり日本と違いはないように感じましたが、1 日の中で同じドクターたちが CABG（3 枝バイパス）後に CABG（2 枝バイパス）＋大動脈弁置換術を行うといったことは日本では経験したことがなかったので日本との違いを感じました。また ICU 回診の際に、台湾では漢方で肝臓や腎臓を悪くして、中には透析まで至ってしまう人もいると聞き驚きました。

今回の留学に行って一番よかったと思うことは今後、継続して英語・医学英語を学ぶモチベーションができたことです。

この実習に参加する前も英語を学ぶ必要性は感じていましたが、この留学を通してより一層強くそれを感じました。

台湾では基本的にどの医師も英語での会話が可能でした。普段のカンファレンスやプレゼンテーションは中国語でやっているという事でしたが、今回私たちが来るにあたって英語でそれらを行ってくださいました。それは学生でも同様でした。今回小児科を回った際に、学生の発表を見学しましたが、どの学生も流暢な英語でプレゼンテーションを行っていました。これほど英語が使えるのは大学の授業の中で何か授業が行われているのではないかと思い、質問してみたところ大学では特にそういった授業はなく、中学校・高校の授業も日本と同様にリーディング・ライティングを重視した教育形態であり、彼女が英語のスピーキングやリスニングを学んだのは個人で通っていた塾だったということでした。それぞれの授業の詳細はわかりませんでしたが、日本と同じような英語教育の環境であるのにこれほど差がついていることに驚きました。

また、総合内科を回った際に、モーニングミーティングで心電図の読み方について非常に流暢に、またわかりやすく英語でプレゼンテーションしている若いドクターがいました。私がその流暢さからてっきり 2~3 年目のインターンかと思っていたところ、いざ紹介されると彼女は私たちと同じ 6 年生の学生でした。マレーシアから留学に来ているというその学生はマレーシアが多民族国家という事もあり、中国語・マレー語・英語を話すことができるそうでした。

同年代のアジアの学生が当然のように英語を使えているのを見た経験から自分の英語能力の低さを痛感しました。幸いなことに日本は学習にしても発表にしても普段の生活で英語が必要となることはほとんどありません。しかし、今回とは逆に留学を受け入れる立場として「明日から、留学生が来るから英語でカンファの発表や手術の説明をしてくれ」と言われたときに果たしてどれだけの人が可能でしょうか。少なくとも現在の私では無理だと感じました。できるけどやらないというのとやろうとしてもできないというのには天と地ほどの差があると思います。毎日のカンファレンスを英語でやる必要はないと思いますが、いざやるように言われたときに英語でのプレゼンテーションや診療ができるように英語を勉強したいとこの留学を通して強く思わされました。まずは、9 月の輔仁大学の学生受け入れに向けて、そして将来の海外での留学に向けて英語や医学を学んでいきたいと思います。

成果報告としては以上になりますが、来年度以降の学生に実習の雰囲気が伝わるように、また派遣される学生の参考になるように普段の生活や準備についても記したいと思います。

・5 月 5～11 日（新光呉火獅記念醫院）

SIM フリーのスマートフォンを持っていたこともあり、桃園空港の中華電信で SIM カードを購入しました。通信量制限なし・30 日間利用可能で 1000NTD でした。

両替に関しては桃園空港内で 3 万 5 千円を両替しましたが結局途中で何度か両替し、最終的にはトータル

で5万円両替しました。途中の両替は新光三越（夜・土日でも両替可能、日本円のおつりは出ない)、昇祥茶店（日本円のおつりが出るので1万円のうち5千円だけ両替などが可能）で行いました。

桃園空港で輔仁大学の学生と合流した後、車で寮まで移動しました。
新光呉火獅記念醫院の寮は台湾最大の夜市である士林夜市から徒歩5分ほどのところにあります。最寄りのMRT駅は劍潭（Jiantan）です。病院までは徒歩5~10分ほどでシャトルバスも出ています。
部屋は4人部屋でしたがもともと住んでいたルームメイトは一人しかいませんでした。トイレットペーパーは各自で用意するようだったので現地のコンビニで購入しました。
洗濯は20NTD、乾燥は10NTDでした。だいたい週2~3回洗濯していました。
食事に関して、朝は近所のコンビニ、昼は院内の店または近くの店、夜は夜市で済ませることが多かったです。
荷物を置いた後は、輔仁大学の学生が士林夜市に連れて行ってくれました。

5/6は日本人学生のみで故宮博物院に行きました。夕方からは別の日本人学生の部屋のルームメイト（輔仁大学の学生）が台北101と象山に連れて行ってくれました。夜は鼎泰豐という小籠包が有名なお店で食事をしました。

実習初日の朝はルームメイトが一緒に病院へ連れて行ってくれました。
白衣はKCを持っていきましたが、あまり台湾ではメジャーでないらしく、現地の学生がジャケットタイプの白衣を貸してくれたので3週間それを着ていました。
この週は先生方にたくさんご飯に連れて行っていただきました。まず輔仁大学の Lee 先生と新光病院の先生方との会食がありました。そこで500NTDがチャージされたeasy card（MRT やバスに乗るのに使うカード）とマグカップをいただきました。また、別の日には小児科の先生たちに火鍋に、王先生（日本の大学で医学を勉強され、日本語も話すことができる小児科の先生）に鼎泰豐に連れて行ってもらいました。どの先生も非常に優しく接してくださりとても安心しました。
空き時間にはマンゴーアイスを食べたり、夜市に行ったり足ツボマッサージを受けたりしました。

・5月12日～18日（耕莘醫院）
土曜日の朝に現地の学生が呼んでくれたタクシーで次の寮に移動しました。
耕莘醫院の寮は病院の敷地内にあるため、病院まではすぐでした。4 人部屋でルームメイト（輔仁大学の学生）が2人住んでいました。ルームメイトが本当に親切で困ることはありませんでした。
最寄りのMRT駅は七張（Qizhang）と大坪林（Dapinglin）のふたつですがどちらも徒歩15分程度と少し離れています。病院からMRT駅までのシャトルバスも出ています。

前の寮同様、洗濯は20NTD、乾燥は10NTDでした。
食事は近くの店で済ませることが多かったです。ホルモン煮込みの店や定食屋などいろ

いろあったので困ることはありませんでした。

この週末は烏来（Wulai）という台湾で一番長い滝がある地域に連れて行ってもらいました。温泉にも行きました。台湾の温泉は水着着用で入るところが多いそうなので、念のため持ち物に水着を持って行ってもいいかと思います。この週は西門、公館夜市、台湾大学などを観光しました。

・5 月 19 日～26 日（国泰綜合醫院）

金曜日の夜に輔仁大学の学生の車で移動しました。なんと私の名前がなかったらしく急遽部屋を用意してもらいました。2 人部屋でもともと住んでいるルームメイトはいませんでした。

国泰綜合醫院の寮は汐止（Xizhi）という場所にあります。ここには国泰綜合醫院の分院があり、そこから本院までのシャトルバスが出ているため、毎朝それに乗って通っていました。本院まではバスで 30~40 分と少し離れています。一度バスに乗り損ねたときは松山駅から電車に乗って汐止駅まで帰ってきました。

こちらの寮は洗濯・乾燥ともにお金はかかりませんでした。

国泰綜合醫院の本院の最寄り MRT 駅は忠孝敦化(Zhongxiao Dunhua)と信義安和(Xinyi Anhe)です。どちらも徒歩 5~10 分ほどのところにあります。

国泰綜合醫院が今回の 3 つの病院の中で一番台北の市街地に近いです。

この週は松山夜市、台湾シャンプー（小林髪廊の本店が病院の徒歩圏内にある)、微熱山丘（パイナップルケーキのお店)、淡水、中正記念堂などを観光しました。

朝は朝食屋さんで毎日鹹豆漿を食べていました。昼は病院内でお弁当がもらえるのでそれを食べていました。夜ご飯は観光がてらどこかで食べることが多かったです。

週末は龍山寺と九分・十分に行きました。

帰りの空港までは車で連れて行ってもらいました。

留学の魅力のひとつにその国の文化を実際に自分の五感を使って感じられることがあると思います。私も滞在中には媽祖という神様の生誕祭に遭遇し、爆竹や楽器をがんがん鳴らして町を練り歩いてお祝いしている様子を見たり、観光客向けではない台湾のご飯を食べたりと台湾の文化や風習を直接感じられました。タトゥー人口が多かったり、路上で喫煙している人が多かったりとガイドブックには載っていないような一面も見ることができ、興味深かったです。短期間の観光で来るのとは違って、その国のよりディープなところまで見られるのも留学ならではの経験でとても面白かったです。

また、台湾の人は非常に優しく、お弁当をもらったものの箸がついておらず困っていたところ、手術室でたまたまお話しただけのドクターが他の人に箸をもらいに行ってくれたり、観光に行くならと仕事の合間に MRT の駅まで一緒に着いてきて案内してくださったり、学生もいろいろな観光スポットに連れていってくれたりと、とても親切だったので留学中困ることはほとんどありませんでした。これからも輔仁大学と佐賀大

学のいい関係が続くといいなと思います。

医学、英語、文化の面など様々な面で、多くのことを学べた留学でした。来年度以降の学生もぜひ積極的に挑戦してみてください。